

柔道整復師の職業的アイデンティティに関する質的研究

—現役柔道整復師および養成校学生の視点からの多角的研究—

アルファ医療福祉専門学校

塩崎 由規

他1名

1. はじめに

柔道整復師は、日本において長い歴史を有する伝統的徒手医療職であり、外傷処置を中心とした臨床実践を通じて地域医療の一端を担ってきた。一方で近年、医療制度の変化、患者ニーズの多様化、養成校の増加、就業環境や業界構造の変容などを背景として、柔道整復師の職能や社会的役割は大きな転換期にあるといえる。

こうした状況の中で、柔道整復師という専門職がどのような価値観や役割意識を基盤として成り立っているのか、すなわち職業的アイデンティティ (Professional Identity: 以下PI) がいかに形成され、変容していくのかを明らかにすることは、養成教育および臨床実践の双方にとって重要な課題である。

専門職のPIは、学生期において一度形成されて完結するものではなく、臨床経験や教育経験、制度的制約、他者との関係性を通じて、継続的に再構成されていく動的な過程であると考えられる。そのため、PIを理解するためには、学生段階と現場段階を分断せず、連続した発達過程として捉える視点が求められる。

そこで本研究では、柔道整復師のPI形成を多面的に捉えるために、二段階の研究デザインを採用した。第1段階では、柔道整復師養成校の学生を対象とした自由記述式アンケート調査を実施し、志望動機、将来像、理想像、職業イメージといった職業観の特徴を明らかにする。続く第2段階では、現場で臨床および教育に携わる柔道整復師への半構造化インタビューを行い、臨床実践や教育観、職業観に関する語りを質的に分析する。

このように、学生と現場という異なる立場から得られたデータを段階的に分析・接続することにより、柔道整復師のPIがどのように形成され、またどのような点で揺らぎや再構成が生じているのかを明らかにすることを本研究の目的とする。

本研究は、柔道整復師教育における専門職形成の理解を深化させるとともに、学生期の学びを臨床実践へとつなぐ教育的支援のあり方を検討するための基礎的知見を提供するものである。

2. 目的

本研究の目的は、柔道整復師養成校の学生アンケートと現職柔道整復師の語りを比較し、柔道整復師のPIがいかに形成・変容しているのかを明らかにすることである。第1段階では、学生アンケートのうち志望動機、将来像、理想像、職業イメージに焦点を当て、特徴を質的記述的に分析し、教育的示唆を検討した。

3. 第1段階方法

3.1 研究デザイン

探索的研究として、質的記述的研究法を用いた。

3.2 対象

対象は、柔道整復師養成校に在籍する 1～3 年次の学生 108 名であった。Google フォームを用いた自由記述形式のアンケート調査を実施し、回答を収集した。

3.3 分析手続き

分析は以下の手順で行った。

- 1) 自由記述回答を意味単位ごとに分割し、誤字修正を行った上でコード化した。
- 2) 同義または類似する表現を統合し、サブカテゴリーおよびカテゴリーへと階層化した。
- 3) 各カテゴリーについて意見数および人数を集計し、学年間の傾向を比較した。

4. 第 1 段階結果

4.1 Q7 : 柔道整復師を目指そうと思ったきっかけ (志望動機)

志望動機として最も多かったのは、職域・経験由来の動機であり (意見 82、人数 68)、「受療経験・治療者への憧れ」(33 名) や「スポーツ経験・トレーナー志向」(22 名) が中心であった。次いで、職業的動機 (意見 25、人数 23) として、「国家資格」「安定志向」「開業志向」が挙げられた。価値的動機 (意見 15、人数 14) では、「人の役に立ちたい」「笑顔を共有したい」といった利他的要素が多くみられた。

4.2 Q8 : 将来働きたい場所と理由

将来の就業先としては、職域志向が大半を占め (意見 93、人数 79)、「接骨院」「スポーツ現場」「整形外科」の順に多かった。職業的動機 (意見 17、人数 16) では、「開業」「労働条件」「経済的安定」が重視されていた。また、価値的動機 (意見 10、人数 9) として、「憧れの先生のようにになりたい」「地域貢献」といった回答もみられた。

4.3 Q9 : 理想の柔道整復師像

理想像として最も多かったのは、臨床的専門性であり (意見 66、人数 57)、「外傷対応力」「幅広い知識」が求められていた。次いで、対人関係・ケア志向 (意見 38、人数 33) として、「共感」「信頼関係」「メンタルケア」を重視する回答がみられた。さらに、倫理・人間性 (意見 14、人数 13) として、「誠実」「感謝」「責任感」など、人間的成熟を理想とする回答も確認された。

4.4 Q10 : 柔道整復師という仕事のイメージ

仕事のイメージとしては、やりがい・魅力 (意見 34、人数 31) が多く、「感謝」「達成感」「患者との交流」が挙げられた。一方で、不安・課題 (意見 31、人数 28) として、「拘束時間」「低賃金」「将来性への不安」が多くみられた。また、職業的特徴 (意見 14、人数 12) として、「国家資格としての信頼と責任」を挙げる回答があった一方、「保険制度」「不正請求」など、業界構造に対する批判的記述も一部に認められた。

5. 第 1 段階考察

本研究の結果から、柔道整復師養成校の学生は、職業選択の段階において「受療経験」や「スポーツ経験」など、個人的体験に基づく動機づけを有していることが明らかとなった（Q7）。将来像（Q8）では、「接骨院」や「スポーツ現場」への志向が強く、柔道整復師を身近な実践の延長線上にある専門職として捉えている様相が示された。理想像（Q9）では、「臨床的専門性」と「対人関係・ケア志向」が並行して挙げられ、学生が求める柔道整復師像は、技術的力量と人間関係性の両立に基づくものであった。一方、職業イメージ（Q10）では、「やりがい」と同時に「労働条件や将来性への不安」が併存しており、PI 形成における理想と現実の乖離が確認された。

6. 第1段階まとめ

柔道整復師養成校の学生は、個人的経験を基盤としながら、臨床的専門性と対人関係的ケア志向の双方を重視する職業観を形成していた。一方で、やりがいと同時に将来への不安も抱えており、理想と現実のはざままで揺れ動いている状況が明らかとなった。教育的には、学生が有する初期の動機や価値観を、臨床現場での学びと結びつける支援が求められる。

しかし、学生が抱く職業観や価値観が、実際の臨床実践や教育経験を通じてどのように再構成されていくのかを検討するためには、現場で活動する柔道整復師の視点からの分析が不可欠である。

そこで本研究の第2段階として、臨床および教育の双方に携わる現場の柔道整復師を対象に半構造化インタビューを実施し、臨床実践、教育観、職業観に関する語りを質的に分析することとした。これにより、第1段階で明らかになった学生の職業的アイデンティティの特徴を、現場段階における語りと接続しながら検討することを目的とした。

7. 第2段階方法

第2段階では、半構造化インタビューを用いた質的調査を実施した。調査は、東京・大阪・愛知・岐阜の4地域において行われた。研究者は、対象者それぞれの施術所を実際に一度は訪問しており、インタビューの実施場所は、施術所内が3名、オンラインが1名、飲食店が1名であった。インタビューに際しては、主に「どのように患者をみているか」「学生が在学中に身につけるべき知識や技術は何か」といった問いを軸に設定した。ただし、質問項目を機械的に順守するのではなく、対象者の語りを尊重し、その場の自然な話の流れに沿ってインタビューが展開するよう配慮した。

7.1 対象者

本研究の研究対象者は5名である。内訳は、臨床実習指導者および専門学校非常勤講師を兼ねる者が4名、臨床実習指導者が1名であった。年齢層は30代前半、30代後半、40代後半に分布していた。いずれの対象者も、院長または代表という立場にあり、日常的に患者および学生の双方と直接関わる立場にあった。

7.2 分析方法

インタビュー内容はすべて逐語的に文字起こしを行った。その後、文字起こしデータを精読し、語りの内容ごとに意味単位を抽出してコード化を行った。次に、対象者ごとに、抽出したコードを用いてマインドマップを作成した。マインドマップは、語りの構造や話題間の関係性を可視化

することを目的として用いたものであり、分析過程における整理ツールとして位置づけた。作成したマインドマップのなかで対象者ごとに抽出されたコードのうち、意味内容が類似するものを統合し、2次コードを付与した。続いて、対象者内で生成された複数の2次コードを検討し、より抽象度の高い概念として整理したものを3次コードとした。本研究では、この3次コードをメタコードとして位置づけた。メタコードは、個々の発言や具体的経験を超えて、各対象者の語りの中に内在する中心的・本質的内容を表す概念であると判断した。最終的に生成されたメタコードを分類し、分析を行った。

8. 第2段階結果

8.1 結果1. 臨床技術および臨床判断に関する語り

臨床技術に関する語りとして、「触診技術の本質」「評価診断・アプローチ」「亜脱臼と整復技術」「臨床思考プロセス」「臨床アプローチの実際」「臨床技術の拡張」「慢性痛への対応」といったメタコードが確認された。これらの語りでは、特定の技法そのものよりも、評価や診断を含む判断の過程、状況に応じた対応、技術の応用や拡張といった側面が中心的に扱われていた。また、慢性痛への対応がコードとして挙げられており、急性期や単一病態に限定されない臨床場面への言及が含まれていた。臨床技術は、手順としてではなく、思考や判断を伴う実践として語られていた。

8.2 結果2. 知識・学習・成長のプロセスに関する語り

知識や学習に関する語りとして、「学習と成長のプロセス」「知識の統合と実践」「学習環境と影響」^{注1}がメタコードとして抽出された。これらの記述では、知識が単独で存在するものとしてではなく、学習の過程や経験との関係の中で扱われていた。特に、「知識の統合と実践」という語りからは、複数の知識が統合され、実践と結びつくことが示されていた。また、学習環境が学習や成長に影響するという記述が含まれており、学習が個人内部の活動に限定されていないことが示されていた。

8.3 結果3. 教育方法および学校教育に関する語り

教育に関する語りとして、「教育方法の工夫」「学校教育の役割」「教育環境の変化と課題」がメタコードとして確認された。これらの語りでは、教育内容そのものよりも、どのように教えるか、どのような環境で教育が行われているかといった点が中心的に語られていた。

また、教育環境が変化していること、それに伴う課題が存在することが示されており、学校教育が一定の条件や制約の中で実施されている状況が表現されていた。

8.4 結果4. 学生および若手施術者に関する語り

学生および若手施術者に関する語りとして、「若手施術者の課題」「教育対象である学生の可能性」「学習環境と影響」^{注1}がメタコードとして抽出された。これらの語りでは、学生や若手施術者が課題を抱える存在として語られる一方で、可能性を有する存在としても記述されていた。また、学習環境が学生や若手施術者に影響を与えるという記述が含まれており、個人の特性だけでなく、周囲の環境との関係が語られていた。

8.5 結果 5. 臨床と教育の関係性に関する語り

臨床と教育の関係に関する語りとして、「現実とのギャップ」「知識の統合と実践」がメタコードとして確認された。これらの記述では、学校教育で学ぶ内容と、臨床現場で求められる実践との間に差異が存在することが語られていた。同時に、知識を統合し実践へと結びつける過程が語られており、教育と臨床が完全に分離されたものではなく、関係性の中で捉えられていた。

8.6 結果 6. 施術者としての在り方・職業観に関する語り

施術者としての在り方に関する語りとして、「施術者として必要な要素」「職業倫理と価値観」「自立と仕事観」「働くことの本質」「世代間の価値観ギャップ」がメタコードとして抽出された。これらの語りでは、技術や知識とは別に、施術者としてどのような姿勢や価値観を持つかが語られていた。また、働くことの意味や、自立に対する考え方、世代間での価値観の違いに関する記述が含まれており、職業観が一様ではないことが示されていた。

8.7 結果 7. 柔道・武道および業界に関する文脈的語り

文化的・業界的文脈に関する語りとして、「柔道と臨床の融合」「武道と臨床の関係」「柔道と教育の相関」「業界の方向性」「業界への問題意識」「施術所の運営」がメタコードとして確認された。これらの語りでは、柔道や武道が臨床や教育と関係づけられて語られていた。また、業界の方向性や問題意識、施術所の運営といった記述が含まれており、個人や教育の枠を超えた文脈が示されていた。

以上の結果から、提示されたメタコード群には、臨床技術、学習と教育、学生や若手施術者、職業観、そして柔道・業界という複数の領域に関する語りが含まれていたことが確認された。これらの語りは、相互に関連する領域として配置されていた。

9. 考察（統合的考察）

本研究は、柔道整復師のPIの形成と変容を明らかにすることを目的として、学生段階（第1段階）と現職段階（第2段階）という異なる発達段階のデータを段階的に分析した点に特徴がある。本節では、両段階の結果を接続し、柔道整復師のPIがどのような連続性と緊張関係のもとで構成されているのかを検討する。

9.1 学生段階におけるPIの特徴とその初期的構造

学生アンケートの結果から、柔道整復師を志望する動機は、「受療経験」や「スポーツ経験」といった個人的体験に基づくものが中心であった。これは、柔道整復師という職業が、抽象的な医療職としてではなく、身近な身体経験や具体的な他者との関係性を通して認識されていることを示している。将来像や理想像においては、「臨床的専門性」と「対人関係・ケア志向」が並行して重視されており、学生の段階ですでに、技術的力量と人間的関係性の両立が理想的な柔道整復師像として構成されていることが明らかとなった。一方で、職業イメージにおいては、「やりがい」と同時に「労働条件や将来性への不安」が併存しており、理想と現実の乖離が示されていた。このことから、学生段階におけるPIは、価値的には肯定的である一方、構造的・制度的側面に対する不安を内包した未だ安定していない状態にあると考えられる。

9.2 現場柔道整復師の語りにみるPIの再構成

第2段階のインタビュー分析では、臨床技術や判断に関する語りが「触診技術の本質」「評価診断・アプローチ」「臨床思考プロセス」など、技法そのものよりも思考や判断の過程として語られていた点が特徴的であった。これは、学生が理想像として掲げていた「臨床的専門性」が、現場では具体的な判断・応用・調整の連続として再定義されていることを示している。また、「知識の統合と実践」「学習と成長のプロセス」といったメタコードからは、学習が在学中で完結するものではなく、臨床経験を通して継続的に再構成される過程として捉えられていることが明らかとなった。学生段階で想定されていた「知識」や「技術」は、現場においては、状況や患者との関係性の中で意味づけ直されていた。

9.3 学生と現場をつなぐ「教育」と「ギャップ」の構造

本研究の特徴的な知見として、現場柔道整復師の語りの中で、「教育方法の工夫」「学校教育の役割」「現実とのギャップ」といったメタコードが多く確認された点が挙げられる。これは、学生段階で形成されるPIと、現場で再構成されるPIとの間に、一定の断絶や調整の必要性が存在することを示唆している。学生は在学中に、理想像や価値観を比較的明確に形成している一方で、現場では「評価」「判断」「責任」「運営」といった、教育段階では十分に可視化されにくい要素が前景化していた。このギャップは、学生の理想が誤っているというよりも、教育段階では経験できない現場特有の要素が存在することに起因するものと考えられる。

9.4 職業観・倫理観における連続性と変容

学生アンケートでは、「人の役に立ちたい」「感謝されたい」といった利他的価値が多く確認された。一方、現場柔道整復師の語りでは、「職業倫理」「働くことの本質」「自立と仕事観」といった、より現実的かつ内省的な価値観が語られていた。この差異は、価値観の断絶というよりも、同一の価値が、立場や経験の変化に応じて再構成されている過程として理解できる。すなわち、学生段階の「人の役に立ちたい」という価値は、現場では「患者に対する責任」「判断の重さ」「倫理的配慮」といった具体的な実践として具現化していた。

9.5 柔道・業界という文化的文脈の中でのPI形成

現場インタビューでは、「柔道と臨床の融合」「武道と臨床の関係」「業界への問題意識」といった、個人の臨床や教育を超えた文脈が語られていた。これは、柔道整復師のPIが、個人の技能や価値観だけでなく、柔道という文化的背景や業界構造の中で形成されていることを示している。学生アンケートでは、こうした業界構造への言及は限定的であったが、現場段階では、保険制度や施術所運営といった要素がPIの一部として不可避的に組み込まれていた。この点は、PIが静的な属性ではなく、立場・経験・制度との相互作用によって変容する動的な構造であることを示唆している。

10. まとめ：二段階研究からみる柔道整復師PIの形成過程

以上の結果を総合すると、柔道整復師のPIは、

- ① 学生段階における個人的体験と価値志向に基づく初期的形成

② 現場段階における臨床判断・責任・制度的制約を含む再構成
という連続的かつ段階的な過程を経て形成・変容していると考えられる。

本研究は、学生と現場という二つの段階を分断して扱うのではなく、同一職種の異なる発達段階として接続的に捉えた点に意義がある。これにより、柔道整復師教育においては、学生が有する初期の動機や価値観を否定するのではなく、それらを現場の学びへと橋渡しする教育的支援の重要性が示された。

注 1) 「8.2 知識・学習・成長のプロセスに関する語り」「8.4 学生および若手施術者に関する語り」
いずれにも該当するため再出している。

共同研究者

(代表) 塩崎 由規
中神 太一